

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14050

研究課題名（和文）学ぶ意義を意識した日本史教育に関する実証的研究 - 和歌森太郎の再解釈を通して -

研究課題名（英文）Study on Japanese history education that is meaningful for learners

研究代表者

角田 将士 (Kakuda, Masashi)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70432698

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：何をどう教えれば、学習者にとって意義深く、民主主義社会の形成者にふさわしい資質・能力、市民性を育成し得る日本史教育になるのか。この問いにアプローチすべく本研究では、子どもの思考力の伸長をめざす日本史教育のあり方を体系的に論じた和歌森太郎の所論、とりわけ、日本史教育における内容選択の視点に着目した。そして、和歌森の所論を参照し、高等学校における地理歴史科を対象とした具体的な授業プランを開発し、その教育的効果の検証を行うことで、学習者である子どもたちにとっての「学ぶ意義」を意識した日本史教育のあり方について、実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は「民主主義社会の形成者にふさわしい資質・能力、市民性の育成を目標とする日本史教育は、何を内容の系統とし、どのような学習方法に依るべきか」として「日本史を学ぶ意義は何か」といった、社会科教育研究上、極めて重要な問いに対してアプローチするものであった。

2017年（中学校）と2018年（高等学校）に告示された学習指導要領では、各教科等を特性や学ぶ意義を踏まえた授業改善が求められている。それに対して本研究では、和歌森太郎の歴史教育論の検討を踏まえた具体的な授業プランの開発と検証を行うことで、これから求められる歴史学習のあり方を実証的に示した点において、社会的意義のある研究となっている。

研究成果の概要（英文）：What and how to teach Japanese history education that is meaningful for learners and appropriate for a democratic society? In order to approach this question, this study focuses on Wakamori Taro's opinion, which systematically discusses how Japanese history education should be suited to a democratic society. In this study, I developed a lesson plan based on Wakamori's theory and verified its educational effect. Through this research, I was able to show a way of learning Japanese history that is meaningful for learners.

研究分野：社会科教育学

キーワード：日本史教育 学ぶ意義 見方・考え方

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

その時々¹の社会の要請を受けながら学習指導要領の改訂は重ねられてきたが、日本史教育については、カリキュラム上、実践上の改革は低調なままである。これには、教育の目標、内容、方法を一体的に論じる、教科教育学的な見地に基づいた日本史教育に関する研究状況の貧困が影響している。教科(社会科)教育学者たちは「日本史」という枠組みに伴うナショナルなイメージを忌避し、これまでは、世界史を事例とした歴史学習モデルの提起(例えば、原田 2000)や先進的な国々のカリキュラム分析(例えば、山田 2011)が歴史教育に関する研究のメインストリームをなしてきた。一方でこれまでの日本史教育についての研究といえば、日本史学上の新知見を教育内容に反映させることを主眼としたもの(例えば、奥山 1989)や、散発的な開発研究(例えば、阿部 2008)が主であった。そのため、「民主主義社会の形成者にふさわしい資質・能力、市民性の育成を目標とする日本史教育は、何を内容の系統とし、どのような学習方法に依るべきか」そして「日本史を学ぶ意義は何か」といった極めて重要な問いが、これまでは看過されてきた。

2. 研究の目的

上記のような背景の下、教科教育学的な見地から、日本史教育の研究を進めてきている。そしてこれまでは、戦前の教科書や戦後の学習指導要領や教科書の分析を行い、公的なカリキュラムレベルの日本史教育はナショナルアイデンティティの形成を志向した点で、戦前と戦後は一貫しており、そのことが学習者の視点に基づいた改革にとって、大きな障壁となってきたことを明らかにしてきた(角田 2010a、2010b、2015)。

一方でこれらの研究は「改革の障壁」というネガティブな視点を導出するものであり、その点で限界があったといえる。より実践的に意義のある研究成果を得るためには、先の問いに正面から取り組む必要がある。そしてこれまでに、昭和 26 年版学習指導要領に基づいた教科書を分析し、小学校の単元レベルでの学習モデルを明らかにしてきた(角田 2012)が、課題が大きい中等段階のカリキュラムモデルや内容の系統性等については未着手である。このような問題意識から、今一度、歴史教育史を振り返ってみると、これに応える可能性を秘めた人物がいたことが知られている。戦後初期において、公的なカリキュラムを前提としつつも、子どもの思考力を中核に、市民性育成を基盤とした社会科の文脈から日本史教育の改革を主張した「和歌森太郎」である。

和歌森は歴史・民俗学者でありながら、歴史教育についても精力的に論を展開し、自ら教科書を執筆するなど、異色の研究者として知られている。同時期の歴史学者たちの多くが日本史の独立を主張したのに対して、彼はあくまでも社会科の一領域としての日本史教育を志向し、「日本人の育成」というナショナルな視点を完全に放棄するのではなく、しかしそれを健全な形で行うために、社会科の枠組みの下で系統的な日本史をどう教授すべきかを論じていた。このような論は当時の実践者たちにも大きな影響を与え、彼が主宰した雑誌『社会科歴史』には多数の実践報告などが寄せられていた。これまでの研究を引き継ぐ本研究においては、和歌森が主張した日本史教育論とそれに影響を受けた授業実践などを取り上げ、先の問いにアプローチする。

3. 研究の方法

【課題 1】和歌森太郎は日本史教育を通してどのような認識・資質・能力を育成しようとしたか

和歌森が執筆した中学校教科書『日本の成長』は、例えば梅野正信によって分析されてきた(梅野 1989)。しかしその分析は学習方法に特化したものであり、内容編成の視点を欠いていた。和歌森の主張は学習方法論に加えて、目標論、内容編成論、学習評価論など多岐にわたるが、これまではそれぞれが断片的に紹介されてきたにすぎない。本研究では、和歌森の主張の全体像、特に「学ぶ意義」を意識する際に課題となる、日本史の内容編成のあり方について、育成しようとする認識・資質・能力の視点から、和歌森が執筆した指導書なども手がかりに解明する。

【課題 2】和歌森太郎が構想した日本史教育はどのような実践として具現化されたか

和歌森が主宰した雑誌『社会科歴史』には、授業モデルの他、実践報告や評価問題の例が多数収録されている。これらについての分析を進め、実証的で実践的な視点から【課題 1】の成果を検証する。

【課題 3】和歌森太郎の主張を今日にどう再生させるか

【課題 1】【課題 2】の成果を踏まえ、和歌森の歴史教育論を今日的視点、とりわけ 2017 年(小・中学校)、2018 年(高等学校)に告示された新学習指導要領の趣旨と照らし合わせながら、学習者である子どもたちにとっての「学ぶ意義」を意識した日本史教育を今日に再生させる手立てを探る。可能であれば、実際の学校現場において実践可能な授業プランを開発し、実践することで、その教育的効果を実証的に提示する。

4. 研究成果

本研究における研究成果は、研究期間を通じて得られた知見を動員して取り組んだ【課題 3】のうち、とりわけ和歌森太郎の所論を参照して開発した単元プランに集約される。

新学習指導要領において、「各教科等を学ぶ意義」の中核をなすものとして、それぞれの教科等の学びに応じた「見方・考え方」が示されており、社会系教科の場合は「社会的な見方・考え方」として示されている。そして、それぞれの見方・考え方を働かせた学習を行うことで、意義

ある学びにつなげていくことが求められている。

社会的な見方・考え方は、社会的事象について探究していく際の「視点や方法（考え方）」とされており、求められる資質・能力を育むための「手段」概念として捉えられている。その一方で、これまでの社会科教育学研究において、見方・考え方は、社会の見方・考え方として、そのものとして成長させることが求められる、「目標」概念としてとらえられてきた。つまり、内容教科としての社会系教科においては、思考力、判断力といった汎用的な能力の育成を主眼とするのではなく、社会的事象の本質や事象同士の関連性、それらの事象が生起してきた理由や社会的な背景を解明していくことで、質の高い社会認識の形成をめざすことが重要であるとされてきた。そのような考え方に基づけば、新学習指導要領において示されるように、学習の「視点や方法」として見方・考え方を捉えるだけでは、活動・形式主義に陥る可能性が大きいと考える。

このような議論や研究の蓄積を踏まえた上で、社会系教科の授業づくりにおいては、「目標」概念としての見方・考え方を意識すること、つまり、子供たちの社会の見方・考え方を成長させていくことがより重要であると考え。それでは、子供たちが日本史を「学ぶ意義」を意識した上で、日本史教育を通じて、どのような見方・考え方の成長を企図すればよいのだろうか。社会系教科には、「民主的な国家・社会の形成者」の育成が期待されている。今一度、その原点に立ち戻るならば、日本史の意義ある学びの一つのあり方として、子供たちの持っている「民主政治についての見方・考え方」の成長を企図した学びがイメージできるものと考え。そして、そのような日本史の学びを企図しようとする際、示唆的なのが、戦後初期において、民主政治についての見識を深めるための日本史教育のあり方を主張した和歌森太郎の所論である。

昭和26年版の学習指導要領においては、中学校社会科として、「一般社会」と並行して、「日本史」を学ぶことになっていた。この独立した「日本史」について、「民主的市民の形成」を志向した社会科の理念に基づいた「社会科歴史」の立場から、そのあり方を体系的に論じていたのが、歴史学者でありながら、歴史教育についても数多くの著作を残した和歌森太郎であった。昭和26年版学習指導要領においては「歴史学習は、単に歴史学そのものではなく、どこまでも、教科としての社会科歴史の学習であり、・・(中略)・・有為の民主的市民の形成を目的とした歴史教育でなければならない¹⁾」とされており、この趣旨に沿って、和歌森太郎は、カリキュラム案の開発や中学校用の教科書を執筆するなど、多岐にわたる主張を行った。ここでは、具体的な授業開発という本研究の趣旨に鑑み、主として、その目標論（何をめざすべきか）、内容選択の視点（何をとり上げるべきか）を参照し、単元プラン開発の方向性についての示唆を得たい。

社会科成立前後の時期においては、日本史も含めた歴史教育のあり方をめぐって、様々な議論が交わされていた。その主要な論点の一つが、日本史の何をとり出して教えるか、その基準をどこに置くかという、内容選択をめぐるものであった。和歌森太郎はこのことについて「過去生活の中から何をとりだして教育するか基準はどこにあるか。・・(中略)・・私は歴史学者ではあるけれども、史学の立場から歴史教育を規定する態度には賛成していない。教育がさきにあって歴史を規定するという見解をとっている²⁾」と述べている。和歌森太郎は、「現実の世界」や「学問の世界」との結び付きから学びの真正性を捉えるのではなく、あくまでも「教育」という観点から、「戦前の教育には認められなかった教育目的、真正な意味での、また下からの公民教育という目的³⁾」、すなわち、「民主的市民の育成」という社会科の理念に基づいた日本史教育のあり方を志向していた。そして、その目標のあり方については「政治についての批判力なり問題意識を強く深く持つようになる。そうなったとき社会科は成功したといえるのである⁴⁾」と述べ、「今の日本の教育に最もほしいことが、社会的責任に対する十分な自覚を持つての健全な代議政治についての見識を養うことにある⁵⁾」とも述べており、日本史の学びを通じて、民主政治についての見識を養うことを志向していた。

また、そのための内容選択の視点として、「時代から時代へ推転した変革期の前後の過程を注意して認識させることである。日本歴史でいうと、国家成立期のこと、大化の改新を促した前後の問題、平城京から平安京へと移った前後の問題、平安期から鎌倉武士の独自の秩序をつくり出した時代、建武の中興前後の問題、織豊政権から、家康の政権確立の間のこと、新井白石や徳川吉宗の、いわゆる幕政改革期の問題、明治維新前後、大正の政党政治確立期、昭和の軍部擡頭前後と太平洋戦争の終末過程といったようなところが、そのおもなものとして拾い上げられる⁶⁾」と述べている。さらに、初等段階を対象にしたものではあるが、「歴史自身を知識として与えるがために、政治史をここに附随させるものではない。そのような安易な政治史を学習させようとすると、とかく史実をむさぼりとして、あれこれと多岐にわたって教え込ませてしまうおそれがある。今いったような目的に沿うだけの史実であればいいという、大胆な切捨てがなければ、子どもたちには何のための歴史であるか、迫力をもってこないのである⁷⁾」とも述べており、日本史を政治教育の場として捉えつつも、単に政治史を教えればよいというわけではなく、健全な民主政治に対する見識を養うために必要となる事象を、日本史の中から選び取っていくことが重要であり、それが子供たちに「何のための学習であるのか」を実感させることにつながると考えている。つまり、和歌森自身は「見方・考え方」という語を用いていないものの、これまでの考察を踏まえれば、彼がめざしていたのは、「民主政治についての見方・考え方」の成長を企図した日本史教育と捉えることができる。

以上のような検討を踏まえた上で、新学習指導要領において、科目の再編を伴う大きな改革が図られた高等学校を対象として、新科目「歴史総合」において実践可能な授業プラン開発に取り組んだ。具体的には、民主政治のうち、とりわけ「政党政治」を対象に、表1に示すように、戦

前における政党政治の展開を省察していくことを通して、生徒たちの見方・考え方を成長させることを企図した、単元レベルでのプランを開発した。

和歌森太郎は、戦前の政党政治について「政黨もまたさっき言うように財閥の金をもたなくては運営が出来ない。政治は結局金だというような悪い因習が働いて、財閥にこびへつらうということからしてこの戦争目的の確立に協力して来る・(中略)・こういうような経過を太平洋戦争への前提として理解されて行けばよい⁷⁾」と述べ、戦前の政党政治の展開、その基盤にあった政党や政党政治の特質を、対外戦争の背景として取り上げている。合わせて、和歌森太郎が執筆した中学校用の日本史教科書である『日本の成長』(実業之日本社、昭和26年)においても、「太平洋戦争はどのようにして起っただろうか」「3 戦争は国民に大きな不幸であった」の章末に配されている「研究」として、「i 政党政治が、だいたいに行われるようになってからも、国民の意志どおりの政治が行われなかったのは、なぜであろうか。」という課題が提示されており、戦前の政党政治の展開について反省的に振り返ることを求めている。

その一方で、現代の高校生たちにとって、政党政治=良いもの、政党内閣=望ましいもの、というイメージは強固であると思われる。中学校社会科の歴史的分野においては、「政党内閣」「普通選挙」「国際協調と軍縮」といったまとまりで学ばれることが多く、そのため、五・一五事件以降の政党内閣の終焉については、軍部の台頭という視点から捉えることが中心となり、それを招いた政党政治の潜在的な脆弱性について、十分に認識できていないと思われた。それに対して、開発単元においては、前記したような戦前の政党政治の画期を意識した上で、その展開を省察していく中で、政党や政党政治の特質、そこに内在する課題について、深く理解させることで、生徒たちが持っている政党政治についての常識的な見方・考え方を、より精緻で、鋭いものへと成長させることを企図した。

また、和歌森太郎は、社会科の理念に基づいた歴史学習の方法論として、歴史を学ぶ意義を感じやすいように、現在の問題や子供たちの問題意識を出発点にして前の時代に遡って辿る「倒叙法⁹⁾」と、それを具現化するために各時代をいくつかのテーマに応じて再構成した「単元学習¹⁰⁾」を提起している。ここではそれを援用することで、開発単元の全体は、表1に示したように、「国民の支持を得て成立したはずの政党政治はなぜ挫折してしまったのか」という今日的な視点を含んだ問いを軸に、その原因を過去に遡って探っていく過程として組織した。

上記の研究成果を踏まえ、開発した単元プランの展開は、以下の通りである。

表1：単元「政党政治の挫折」の全体構造（全三時間）

	パート	主な発問	時間
導入	問いの設定 【政党政治と原の暗殺】	なぜ国民から支持を得た原敬は暗殺されることになったのか。国民の支持を得て成立したはずの政党政治はなぜ挫折してしまったか。	1時間
展開	問いの探究 【初の政党内閣の成立と課題】	初めての政党内閣である隈板内閣はなぜ短命に終わってしまったのか。	
展開	問いの探究 【政党の成長と桂園時代】	なぜ藩閥と政党は協調するようになったか。桂園時代にはどのような意味があったのか。	1時間
展開	問いの探究 【政党の伸長と政党政治の課題】	原が普選に反対していたのにも関わらず、なぜ多くの有権者は政友会を支持したのか。	
展開	問いの探究 【二大政党と政党政治の終焉】	原暗殺後には継続できた政党内閣が、なぜ五・一五事件の後には継続できなかったのか。	1時間
終結	学習の発展 【政党政治の挫折から考える】	政党政治はなぜ挫折していったのだろうか。政党政治に対して私たちはどのように向き合っていけばよいか。	

この単元プランは、広島県立三原高等学校の清水智貴教諭の協力を得て、第2学年の「日本史A」を対象に、男子5名、女子17名のクラスで実践し、その教育的効果の検証を行った。単元実施の前後において、生徒たちの政党や政党政治についてのイメージ(見方・考え方) 歴史学習に対するイメージの成長や変容を見取るために、下記のようなアンケート調査を行った。

- Q1：現在国会では様々な政党が活動しています。この「政党」とは、「誰のために」「どのようなことをする」組織でしょうか？あなたの考えを述べなさい。
- Q2：日本で行われている「政党政治」とはどのような政治でしょうか？そこにはどのような利点や弱点があると思いますか。あなたの考えを述べなさい。
- Q3：日本の政党政治は明治時代に誕生しましたが、五・一五事件(1932年)で犬養毅首相が殺されたことで終わりを迎え、その後は第二次世界大戦が終了するまで復活することはありませんでした。戦前日本において政党政治を継続できなかった理由は何だと思えますか？あなたの考えを書きなさい。
- Q4：戦前日本において「政党政治」は終わりを迎えることになりましたが、現在においても同じようなことが起こる可能性はあると思えますか？あなたの考えを書きなさい。
- Q5：なぜ私たちは過去の出来事である「歴史」を学ぶのだと思えますか？あなたの考えを書きなさい。

また、単元末において、戦後初期における憲法改正論議での美濃部達吉（戦前期の政党政治を理論的に支えた憲法学習）の主張（憲法自体の改正よりもそれを機能させることの方が重要であるという主張）に対して、「美濃部達吉は、どのような運営を行えば、民主主義を実現することができるかと考えていたのか。この単元で学んだ内容を踏まえ、具体的に述べなさい。」という論述問題に取り組むことで、単元を通じて獲得した見方・考え方を活用することを求めた。

プレテストにおいては、Q1とQ2への回答から、「国民のため」という意識や政党に対する素朴な信頼感が強く、「個別利益の代表者」「自分たち（政党）の主張を実現するために政権を目指す」といった政党の性質についての理解は弱いという傾向が見出された。また、Q3への回答からは、「軍部が政党政治を倒した」という理解が中心的であり、国民の支持が政党から離れて他勢力（軍部など）へ移ったという「政党と国民との関係」についての理解は弱いという傾向が見出された。Q4への回答からは、「（現在においては政党政治を脅かすような）軍が存在しない」「国民主権や三権分立などが憲法で決まっている」を理由に政党政治崩壊の可能性はないとした者が多く、戦力不保持や三権分立などの「制度」に対する信頼感が強いという傾向が見出された。このような生徒たちの状況を踏まえて、戦前の政党政治を省みることで、主権者としてより厳しく政党や政党政治を捉える見方・考え方を身に付けることを企図して、単元プランを実践した。

単元の実施後の評価問題では、政党政治の失敗は憲法など制度だけの責任ではなく人々（国民）の政治への意識や見方の変革を重視する記述や戦前の政党政治の政策やその失敗（個別利益や私益を優先）を踏まえた記述、政党や政党政治の特徴を踏まえた上で、国民の問題として捉える記述などが見られた。また、ポストテストにおいては、Q4への回答については、政党政治崩壊の可能性について、「可能性がある」と答えた生徒の割合が大幅に増え、その理由について、政党政治は国民からの信頼など、「国民との関係性」に関する見方・考え方を獲得している様子が見て取れた。一方で「可能性がない」と答えた生徒についても、軍との関係性についての記述が減り、過去の政党政治の失敗から学ぶことで現在の制度は作られている、現在の制度には過去の教訓が生かされている、といったことを理由として挙げる生徒が現れるなどしていた。これらの学習評価の結果から、常識的で素朴だった政党や政党政治に対する理解の深まりを見て取ることができた。また、Q5への回答からは、知識の集積として歴史を捉える歴史学習観から、歴史の意味や有用性についての意識、また、歴史学習を通じて今後の社会に向き合うための力（思考力）を身に付けることができるとする歴史学習観への変容が見られた。つまり、歴史を通じて「考える力」を鍛え、「見方・考え方」を成長させるという認識を、単元の学習を通して生徒たちは持つことができていた。

以上のような成果から、単元プランの教育的効果を確認することができたものとする。その一方で、学年最後の授業評価アンケートの結果からは、一部の生徒たちにとっては、歴史＝暗記というイメージが強固であることも明らかになっており、継続的な単元開発の必要性が痛感された。開発した単元プランにおいては、和歌森太郎が論じた倒叙法的な単元展開を意図して、学習課題の設定とその後の展開を構想したが、展開ごとの配列は時系列に従ったものとなっていた。そのことによって、歴史学習とは、結局のところ、歴史的事実を順番に学習していくもの、というイメージを覆すことができなかつた一因となつていとも考えられる。本研究の成果を踏まえた上で、今後は、時間的に隔てられた事象の比較を単元展開の軸とするなど、新たな単元開発に引き続き取り組んでいきたい。

<註>

- 1) 『社会科教育史資料2』東京法令、1974年、p.411.
- 2) 和歌森太郎「社会科と歴史」『社会科歴史』第2巻、第7号、実業之日本社、1952年7月、p.13.
- 3) 同上、p.11.
- 4) 『和歌森太郎著作集13』弘文堂、1982年、p.326.
- 5) 前掲7、p.14.
- 6) 和歌森太郎『歴史教育法』金子書房、1954年、p.75.
- 7) 同上書、pp.113-114.
- 8) 和歌森太郎『日本史教育の理論と実際』小石川書房、1949年、p.285.
- 9) 「対談 倒叙法について」『社会科歴史』第3巻、第5号、実業之日本社、1953年5月、pp.2-11.
- 10) 梅野正信『和歌森太郎の戦後史』教育史料出版会、2001年、pp.141-142.

<参考文献>

- ・阿部由貴子（2008）「歴史的見方・考え方を習得する学習の評価」『社会科研究』第68号。
- ・梅野正信（1989）「始発期における『社会科歴史』教科書の具体的検討」『社会科研究』第37号。
- ・奥山研司（1990）「高校日本史における中世史像の変革」『社会科研究』38号。
- ・角田将士（2010a）『戦前日本における歴史教育内容編成に関する史的研究』風間書房。
- ・角田将士（2010b）「戦後初期歴史教科書『くにのあゆみ』における歴史認識形成の論理」『社会科教育論叢』第47号。
- ・角田将士（2012）「日本史教育における学習課題の現在性」『立命館産業社会論集』第48号3巻。
- ・角田将士（2015）「中学校学習指導要領における二つの歴史教育論」『社会科教育論叢』第49集。
- ・原田智仁（2000）『世界史教育内容研究』風間書房。
- ・山田秀和（2011）『開かれた科学的な社会認識形成をめざす歴史教育内容編成論の研究』風間書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 角田将士	4. 巻 725
2. 論文標題 「近現代史と政治がわかる『この人物』お宝授業ネタ&エピソード 近現代史 :近代の日本（幕末～第一次世界大戦まで）『伊藤博文から立憲主義を学ぶ』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治図書編『社会科教育』	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 727
2. 論文標題 「『社会との関わり』を考える学習問題 よい例・悪い例（歴史）歴史を通じて『私と国との関わり』について考える」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治図書編『社会科教育』	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 7
2. 論文標題 「『民主政治の見方・考え方』の成長をめざす日本史単元開発 - 高等学校地理歴史科『歴史総合』単元『政党政治の挫折』 - 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館大学教職教育推進機構編『立命館教職教育研究』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 710
2. 論文標題 「人物で読み解く歴史授業『戦争・戦乱（と平和）』をどう教えるか『斎藤隆夫 現代社会とのつながりを意識した授業づくりを』」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 明治図書編『社会科教育』	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masashi KAKUDA	4. 巻 巻数なし
2. 論文標題 What is the educational role of social studies classes?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Korea Association of Social Education “ Re-conceptualization of Democratic Citizenship Education:Justice,communication,Peace ”	6. 最初と最後の頁 279-309
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 714
2. 論文標題 「主体的・対話的で深い学びの視点から 地理・歴史・公民 プラス のポイントはここだ 【歴史】三つの内容を意識した『深い学び』をめざして」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 明治図書編『社会科教育』	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 55
2. 論文標題 「『学ぶ意義』を意識した魅力的な授業づくりに向けて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大分県高等学校教育研究会地理歴史科公民科部会編『研究集録』	6. 最初と最後の頁 33-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 701
2. 論文標題 「見方・考え方を働かせた公民授業 - 二系統の見方・考え方を連動させた授業づくりを - 」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 明治図書編『社会科教育』	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 1
2. 論文標題 「『総合的な学習の時間』の改革(2) - 地域社会を対象にしたカリキュラムをデザインする視点 - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 成安造形大学教職課程編 『成安造形大学【教職課程報告】』	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角田将士	4. 巻 54
2. 論文標題 「新学習指導要領において求められる授業改善の視点 - 目標・内容の多層構造を意識したカリキュラムのデザインに向けて - 」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大分県高等学校教育研究会地理歴史科公民科部会編 『研究集録』	6. 最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「『学ぶ意義』を意識した歴史(日本史)授業の実現に向けて」
3. 学会等名 社会科学学習の評価改善研究会(2019年度第1回)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「社会系教科の授業づくりにおいて『本質的な問い』『逆向き設計』をどうとらえるか - 高等学校日本史の単元開発を通して - 」
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会(ラウンドテーブル)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「これからの社会系教科授業に求められるもの - 『見方・考え方』の成長を意識した授業づくり - 」
3. 学会等名 立命館大学実践教育学会第3回研究大会（シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 角田将士・清水智貴
2. 発表標題 「『民主政治の見方・考え方』の成長をめざす日本史単元開発 - 高等学校地理歴史科『歴史総合』単元『政党政治の挫折』 - 」
3. 学会等名 社会系教科教育学会第31回研究発表大会（自由研究発表）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「社会科授業に期待される教育的役割とは何か - 日本における中等段階の実践から見えるもの - 」
3. 学会等名 韓国社会科教育学会2018年度学術大会（国際シンポジウム）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「社会系教科授業における『三つの内容』を意識した学校現場への働きかけ - 『研究授業』を通じたこれまでの関わりを振り返って - 」
3. 学会等名 社会認識教育学会（2018年度研究会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「社会科授業を通して子どもたちは何ができるようになればいいか - 三つの内容を意識した授業・評価問題づくりに向けて - 」
3. 学会等名 社会科学習の評価改善研究会（2018年度第2回）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「社会科授業における『見方・考え方』の成長とその評価 - 活動形式主義に陥らないために - 」
3. 学会等名 社会科学習の評価改善研究会（2018年度第5回）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 角田将士
2. 発表標題 「これからの社会科授業に求められるもの - 『見方・考え方』の成長を意識して - 」
3. 学会等名 2017年度立命館大学英語教員授業力向上研修会パネルディスカッション「アクティブ・ラーニングと教科の特殊性 - 」
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 浅川俊夫，浅田淳一，池野範男，伊藤直之，井田仁康，大西宏治，奥山研司，兼間昌智，熊田禎介，黒崎至高，桑原敏典，杉山勉，関川暢洋，田口紘子，棚橋健治，土谷満，中尾敏朗，長島和広，永田成文，二川正浩，橋本康弘，水山光春，森賢士，谷田部玲生，山口泰宏，山下豊（角田将士）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 214
3. 書名 『授業が変わる!新しい中学社会のポイント』	

1. 著者名 篠原正典, 森田真樹, 大畑健実, 石原一則, 細尾萌子, 富永直也, 山田直人, 小川博士, 橋崎頼子, 柏木智子 (角田将士)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 211
3. 書名 『新しい教職教育講座 教職教育編 総合的な学習の時間』	

1. 著者名 棚橋健治, 草原和博, 福田喜彦, 渡部竜也, 竹中伸夫, 岡明秀忠, 土肥大次郎, 田口紘子, 吉村功太郎, 永田成文, 山田秀和, 中本和彦, 宇都宮明子, 梅津正美, 金 鍾成, 鈴木 悠介, 河原洸亮, 守谷富士彦, 両角遼平, 宅島大亮, 小栗優貴 (角田将士)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学術図書出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 『中学校社会科教育・高等学校地理歴史科教育』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----